

美を

AGORA Special

vol.317

Boston

奥紀栄=文
Text by AGORA

奥宮誠次=撮影
Photo by Seiji Okumiya

The History of the Museum of Fine Arts, Boston

受け継ぐ

国外において最も優れた日本美術のコレクションを有する、ボストン美術館。

質・量ともに第一級の作品群を収集し、現在にまで受け継がれる東洋の美をこの地にもたらしたのは、明治時代に日本を訪れた3人のニューイングランド人、エドワード・S・モース、アーネスト・F・フェノロサ、ウィリアム・S・ビゲロー、そして、岡倉天心である。世紀を超えて受け継がれてきた美を巡る物語を、ひもとく。

場所

この仏教寺院展示室のほか、隣室にも鎌倉時代に作られた「金銅聖観音坐像」や快慶作「弥勒菩薩立像」などが展示されている。



モース、フェノロサ、ビゲロー

The History of the Museum of Fine Arts, Boston

東洋と西洋の美の仲介者となったポストニアン

本館二階のギャラリー二七九番
ほの暗い展示室の正面には、八五〇年余の昔に薄く開かれた半眼を今も空に向け、大日如来が鎮座している。部屋の角には毘沙門天と不動明王が、白壁に影を揺らめかせて立つ。ここがアメリカ東海岸の街であることを、一瞬、忘れる。この仏たちはかつて、いずこの寺院に安置されていたものだろうか。大海を越え、遙かな旅をしてこられたのだろう。

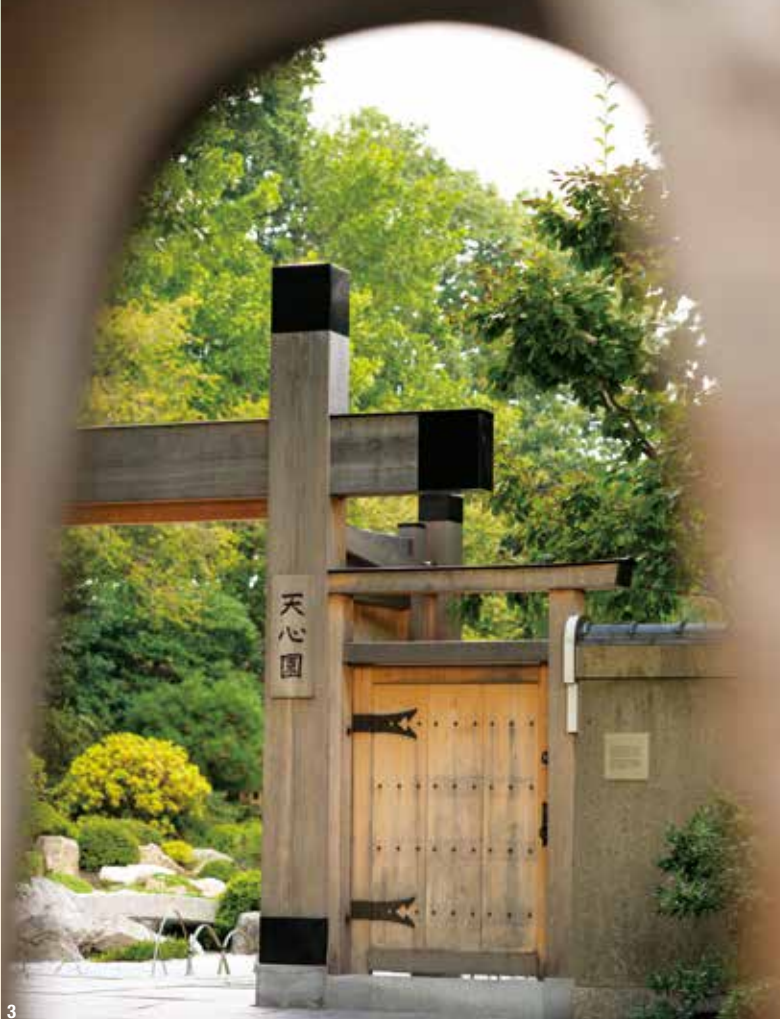
法隆寺を模して設計されたこの仏教寺院展示室がボストン美術館に誕生したのは、同館が市の中心部コブリー・スクエアから現在地ハンティントン街に移転した一九〇九年のことだ。従来は材質と技法ごとに展示されるのが常だった美術品を時代ごとに展示し、文化の連続性を示すという、当時としては画期的な方法が採られている。これを提唱したのが、人生最後の約一〇年間をボストンと日本を行き来して過ごし、同館で二代目の東洋部長を務めた岡倉天心である。なぜ、天心はこの地に東洋の美を集めたのか。そこには、ヨーロッパ美術に対峙しうるアジア美術の価値を顕そうとした人々の物語が、秘められている。

ボストン美術館が開館したのは、一八七六年。アメリカ独立一〇〇年の記念事業として、多くの実業家や市民の寄付により設立された。造船・海運業と漁業・製造業で新大陸屈指の富の集積地となっていたボストンでは「フルオーケストラと美術館をもち欧州の都市に伍する」という気概があった。古典彫刻の石膏像やエジプト美術、ヨーロッパ絵画に加え、日本の作品も開館したその年に購入されている。同年ペンシルバニア州で開催されたフィラデルフィア万博に展示されていた、手あぶりなどの金工芸や漆器、七宝焼の灯籠などで、いずれも明治政府が外貨獲得のために輸出を図った美術工芸品であった。

この万博に通い詰めた、一人の若者がいた。当時ハーバード大学大学院に通っていたアーネスト・F・フェノロサ、後のボストン美術館初代東洋部長である。急速に近代化・産業化された自国の製品にはない精妙な工芸品は多くのアメリカ人を魅了し、欧州に次ぎこの地にも「ジャポニズムブーム」が巻き起こる。フェノロサ自身「日本の展示は驚異の宝庫だ」とその印象を言葉に残しているが、当時はまだ、未知の国に対する好奇心でしかない。その後、彼を本物の日本に連れ出すのは、動物学者として日本に渡り、大森貝塚の発見で日本の考古学の基礎を築いたエドワード・S・モースである。



4



3

3.美術館に併設された枯山水の庭園「天心園」。4.モースが入手した十二代樂吉左衛門の茶碗。5.河鍋暁斎の「風神・雷神」。風神(写真)の一幅をビゲローが、対の一幅雷神をフェノロサが購入したという。6.日本美術の常設展示室。



6



5

仏教寺院展示室の隣室に、一碗の黒茶が展示されていた。説明板にはモースが収集したものと書かれている。東京大学の教授として招聘され、一八七七年から計二年半余を日本で暮らしたモースだが、そこで出会った陶磁器に魅せられ、それらを収集し、産地・窯元別に系統的な分類をしたことはあまり知られていない。滞在中に五〇〇〇点を超える作品を集め、後にボストン美術館に寄贈。自ら管理者として同館に勤務し記録を完成させている。モースはボストンに一時帰国する度に、人々に日本文化の素晴らしさを伝えた。その話に魅せられモース三度目の訪日に同行したのが、後にボストン美術館理事となるハーバード大学出身の医師ウィリアム・S・ビゲロー。来日後日本美術に傾倒し、七年間の滞在中に三万点以上の浮世絵や四〇〇〇点もの絵画、漆器・刀剣や装束を収集した。同じ頃、モースは自身が理

1.御影石で造られた美術館の正面部分。取材時にはちょうど、歌川国芳・国貞の企画展が開催されていた。2.本館1階、インド美術の展示室。



1

2

学部の教授を務める東京大学の政治・哲学・理財学の教授職を、自身と同じボストン近郊の港町セーラム出身だった俊英フェノロサに打診。卒業後の進路を決めかねていたフェノロサは一八七八年、その勧めに従い日本を目指した。東京・本郷の官舎に住んだフェノロサは教授職の傍ら、古物商からさまざまな絵を購入していた。だがある日、かつてハーバード大学の留学生として自身と同窓だった金子堅太郎に「半分以上が贋作だ。こんなものを日本美術というのは考えものだ」といわれる。どうすれば本物がわかるようになるのかと問うフェノロサのために、金子は旧藩主の黒田侯爵が集めた古今の名画——円山応挙、狩野探幽、雪舟などを見せ、さらに日本の美術史を英訳し講釈できる学生を探し、狩野派の絵師・狩野友信にも引き合わせる。フェノロサはこの後、狩野派本家・狩野永恵らに直接日本画の鑑定を学び、画名を授けられるほど日本画の研究に没頭した。そして「性急な西洋画の模倣ではなく、日本人旧来の伝統の上に西洋画の利点を取り入れるべきだ」と主張。自ら文部省の職員となり美術行政に働きかけ、力を失っていた日本画壇を奮立たせる。三人がやってきた明治初期の日本では急速な欧化が進み、全国の古社寺で廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、仏像や仏画の多くが遺棄されていた。文化財という概念もまだない。経済的に逼迫した旧大名家からは多くの名画も市場に売り出されていた。古いものとして顧みられなくなったこうした日本美術の散逸を惜しみ、モース、フェノロサ、ビゲローはその収集・研究を目的に日本各地を旅した。「三人の収集品を集めて、ボストンに日本美術の府にしたい」と、モースは日記に残している。その言葉通り、一八九〇年、彼らの約六万点を超えるコレクションが核となり、ボストン美術館に東洋部が誕生。一二年の日本滞在から帰国したフェノロサが初代部長となり、ビゲローが美術館理事に就任する。そしてこのコレクションをさらに拡充していったのが、東京大学在学中からフェノロサの通訳として同行し、その薫陶を受けた岡倉覚三、のちの天心だった。